

群 教 セ	F09 - 01
	平 16.224集

「ほっとルーム」の運営について

— 不登校傾向にある生徒への進路指導 —

特別研修員 齊藤 和仁（長野原町立東中学校）

< 研究の概要 >

不登校生徒への進路指導をどう行うかという問題に、今年度開設された「ほっとルーム」の機能を生かして取り組んだ。具体的には、基礎学力を高める学習支援、関係作りを通じた学級復帰、将来へ向けた「生き方」指導の3点に焦点を絞って実践を行った。その結果、生徒の実態を踏まえた、上記の計画的な取組が効果的であることがわかった。

【キーワード：教育相談 不登校 ほっとルーム 進路指導】

主題設定の理由

本校では、年度当初から4名の不登校生徒がいる。いずれも中学校入学以前から不登校が心配されていた生徒たちであった。1年生に比べ、2年、3年と学年が上がるにつれ、徐々に登校への意識が高まっている。その大きな要因が、高校進学を含めた「進路」に関する意識の高まりである。家庭訪問や「ほっとルーム」における面談でも「勉強が全くわからない。どうしよう...。」「早く教室で勉強できるようになりたい」という悩みを打ち明けたり、仲の良い友達は何の高校への進学を希望しているのか心配するといった普段の様子からも推察できる。そこで、本研究では「不登校生徒の進路指導をどう進めるか」という問いを設定し、「ほっとルーム」機能の柱の一つとして実践を進めた。

研究のねらい

本研究は、「不登校生徒の進路指導をどう進めるか」という問いを、「ほっとルーム」の機能充実という観点から明らかにする。そして、不登校生徒の学力保障を図るとともに、自分の「生き方」を考えさせ、今後の進路に関する見通しを持たせることをねらいとする。

研究の見通し

本校では、3年前から配置されているスクールカウンセラー（以後SC）とともに、校内の教育相談機能を整え、継続的な実践を積み重ねてきた。そして、今年度は「ほっとルーム」に基礎学力を高める学習支援、関係作りを通じた学級復帰、将来へ向けた「生き方」指導という新たな機能を加えることにより、不登校生徒に対する進路指導がより効果的となるであろう。

これらの実践を土台として、計画的な指導・援助が困難とされてきた不登校生徒への対応を研究することにより、より充実した「ほっとルーム」の運営を目指す。

研究の内容

1 研究課題

基礎学力を高める学習支援
関係作りを通じた学級復帰
将来へ向けた「生き方」指導

2 具体的方策

上記の研究課題を受けて、以下の ~ の実践を行う（図1）。

「ほっとルーム」における活動の中に、全校で取り組んでいるドリル学習を組み込む。そして、基礎学力の向上を図るとともに、得られた達成感が以後の学習意欲につながるように配慮する。（実践1）

不登校生徒本人や学級の実態を基に、比較的参加しやすい学校行事などから生徒間のリレーション作りを行う。以後、実技教科などの参加しやすい授業から教室復帰を目指す。

（実践2）

様々な学習その他の活動を通して、「生き方」の多様性に気付かせる。そして、学級活動における進路指導への積極的な参加を促す。相談室における面談や学習活動の中で、VTRや資料を活用して個別指導（コンサルティング）を充実させる。（実践3）

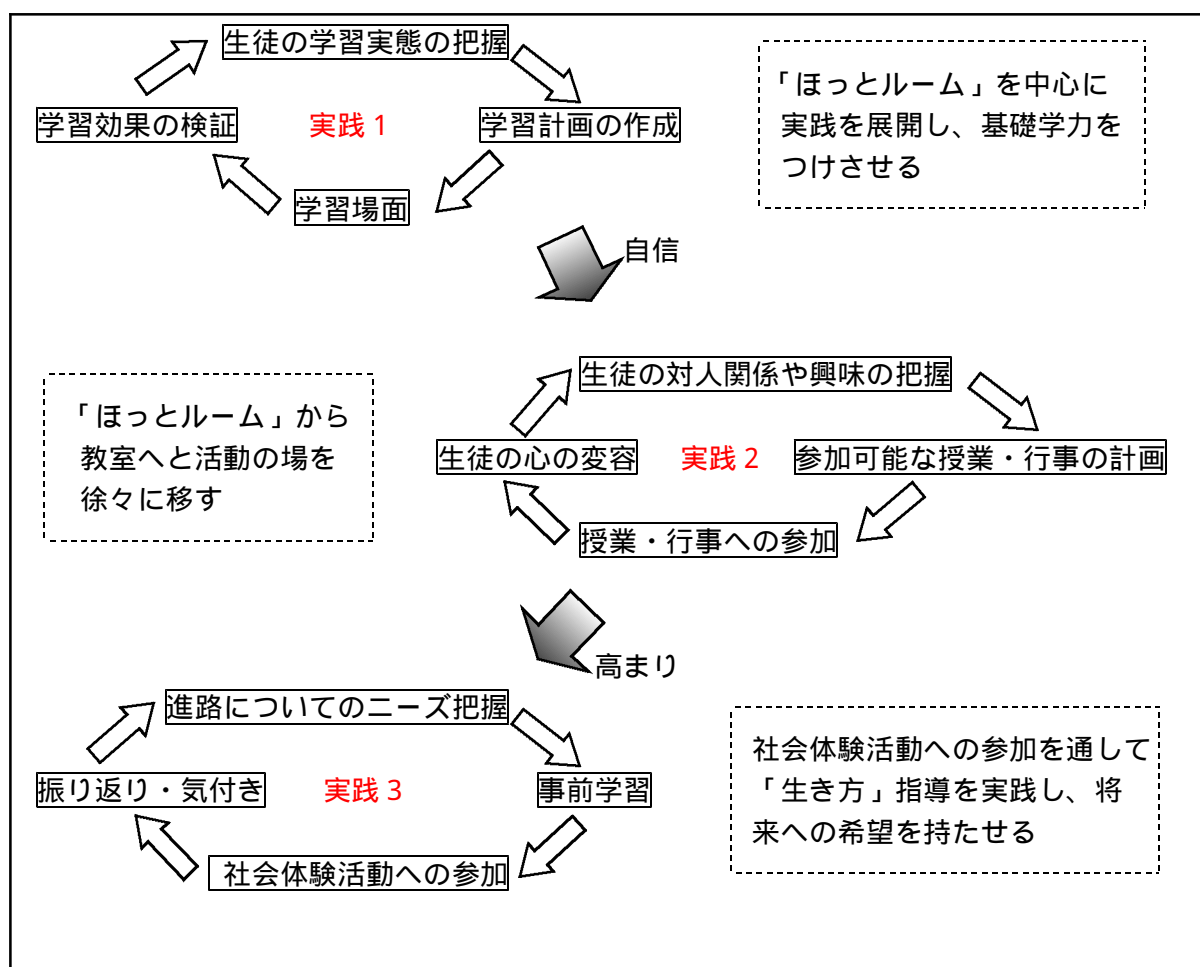


図1 各実践における円環的な作用の構造図

3 計画の流れ

本校の「ほっとルーム」における具体的な取り組みと各実践との関わりを表1に示す。

表1 学期ごとの具体的な取り組みと実践との関わり

	「ほっとルーム」における具体的な取組				各実践の主な実施時期
	実践1	実践2	実践3	常時活動	
1 学期	基礎学力の補充 学習習慣作り	教員や同級生との関係作り	将来の夢 「自分」を見つめる	教育相談 学習相談	
2 学期	継続的・計画的な学習	不定期な授業への参加 行事への参加	福祉活動への参加 進路目標設定		
3 学期	学習のまとめ	定期的な授業への参加	進路目標達成へ向けて 次年度の目標		

4 本校の「ほっとルーム」の概要

(1) 「ほっとルーム」内の配置

平成16年8月開設。3Fに設置してあった第1相談室を改装して、相談活動の拠点として活用している。他に1Fに第2相談室がある。こちらは主に教室へ入る前の準備空間として活用している。

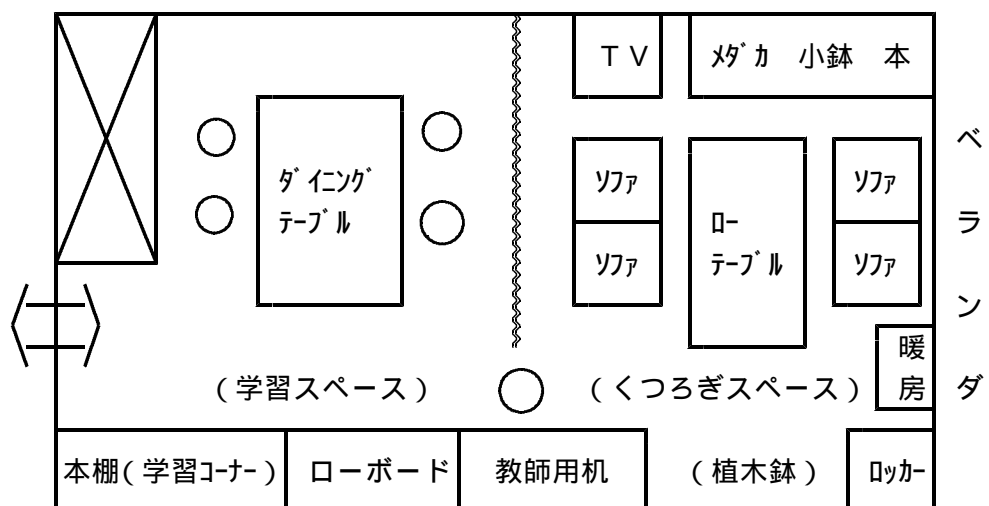


図2 本校の「ほっとルーム」内配置図

図2、図3にあるように、室内は手前の学習スペースと窓側のくつろぎスペースに、中央の仕切りによって区切られている。来室生徒の様子と本人の希望によって対応できるようにした。また、仕切りは折りたたみ式で、移動できるようになっている。相談室内では上履きを脱ぎ、

くつろいだ状態で過ごせるように、床一面にカーペットを敷いてある。玩具等は数種類のパズルがある他は置いていない。生徒が自由に使える機器としてデスクトップ型コンピュータとテレビ・ビデオ、そしてラジカセが置いてある。また、環境面ではメダカの水槽と観葉植物を所々に配置している。入り口脇の本棚には、学習用のドリルや、各高校のパンフレットなどを揃え、自由に閲覧できるようになっている。

(2) 「ほっとルーム」の主な機能

本校の「ほっとルーム」には、大きく分けて以下の4つの機能をもたせている。

カウンセリング機能...相談の窓口として、日常的に生徒の悩みを聞いたり、面談を実施しながら問題解決にあたる。また、必要に応じて保護者との面談を行ったり、担任の要請により家庭訪問を実施したりする。



図3 本校の「ほっとルーム」

心理診断機能 ...SCを中心とした心理テストの実施などにより、生徒の内面を把握し、支援の内容や方法などを検討し、その後の面談や指導に役立てる。

情報集約・提供機能...SCや担任などから提供された情報を集約し、必要に応じて関係者への情報提供を行う。また、チーム援助会議の開催や運営を統括する。

補助学習機能 ...授業へ参加できない生徒への学習相談に応じ、生徒のニーズに応じた基礎的な学習を支援する。

本研究は、4つ目の補助学習機能を発展させたかたちで実践を行った。

5 実践

(1) 基礎学力を高める学習支援

ア 教科担当の教員とのマンツーマン指導

本校では「空き時間割」を作成し、不定期に登校してくる生徒への対応を図っている。そして、「ほっとルーム」等における対応は、学年、もしくは学校全体で関われるような体制を取っている。そこで、本人の関心に応じながら、対応した教員の教科に関わる学習指導を取り入れることにより、基礎学力の定着を図っている。

イ ドリル学習による基礎基本の定着

今年度の校内研修は、「基礎学力の向上」をテーマとし、「中学一年の学習内容の習熟」が重点項目の一つに挙げられている。そして短学活で活用しているミニドリルを「ほっとルーム」内の学習コーナー（図4）にストックしておき、生徒の学習ニーズに応じたスモールステップ学習に活用している。そして学習の成果は、学習カードに記入して、これまでの振り返りを容易にした。



図4 学習コーナー

(2) 関係作りを通した学級復帰

ア 学校行事に参加してみよう

9月4日に行われた体育大会では、積極的に参加を促した。その結果、3名の不登校生徒が、途中から競技に参加できた。特に症状の重い1年生は、学級の団結の見せ場、「長縄跳び」に参加することができた。初めて学級のみんなと跳んだにも関わらず、学級新記録が出るなど、盛り上がりを見せた。

イ 親しみやすい先生を見つけよう

「空き時間割」が機能しはじめて、ある程度対象生徒と教員との関係が出来てくると、次の段階として授業等諸活動への参加を考えていかなければならない。そこで「空き時間割」で応対した教員の中で、比較的話しやすかった(なじみやすかった)教員と個別に活動、もしくは、当該授業への参加などを促している。

ウ その場で参加できる(継続性が少ない)教科で授業に参加してみよう

作業や実技が多い教科を中心に、授業への参加を促している。作業では、隣席の友人から教えてもらいながら取り組めるため、拒否反応が少ない。また、「自分にもできた!」という達成感が味わえるような学習内容であれば、その後の継続的な参加につながりやすくなる。

(3) 将来へ向けた「生き方」指導

ア 校外の体験活動への参加を通して

3年生の修学旅行では、多くの人と触れ合う機会がある。そこで、不登校生徒には学年の学習課題とは別に、いろいろな場面において、そこで働く人たちの様子を見たり、話しかけたりできるようにがんばってみようという課題を設定した。

その後の面談の中で、活動の様子を振り返ることにより、「職業」や「働くこと」に関する考えを深めた。

2年の農業体験学習では、朝の収穫や植苗を手伝うなど、早朝から丸1日農家で過ごした。その中で野菜作りの大変さや楽しさなど、農家の方から貴重なお話を聞かしてもらいながら「働く」ことの意義を実感できた。(図5)

イ 福祉活動への参加

学校行事においてはアルミ缶回収や花いっぱい運動など、福祉的な取組があるが、多くの生徒との関わりを避ける傾向にある不登校生徒にとって、必ずしもいい面ばかりではないように思われる。そこで本校にあるボランティアサークル「ボランティアし隊」の活動への参加を通して、学校以外の人たちとも関われる機会を設定した。

8月末に行われた近隣老人ホームの納涼祭では、サークルの生徒を中心に、半日の活動に取り組んだ。準備から模擬店、そして後片付けまでがんばることができた。(図6)

ウ 「ほっとルーム」内における指導

学級活動などの進路に関わる授業に参加でき



図5 農業体験学習



図6 納涼祭のステージ発表

なかった場合の対処として、「ほっとルーム」等における面談の機会を利用して補習授業を行っている。その際、学習カードと同じ様式の進路カード（図7）を活用して、指導に役立てている。

数 学

進路指導

学年	単元内容	学習日	学年	単元内容
1年	正の数・負の数	/	1年	中学生になって
	文字と式	/		将来の夢と進路の選択
	方程式	/		私の夢と希望
	比例と反比例	/		個性の理解
	平面図形	/		身近な職業「働く人々の仕
	空間図形	/		職業調べ「職業について調
	課題学習	/		進路計画の必要性
		/		職業調べ発表会

図7 学習カードと進路カード(一部)

7 研究の成果

生徒の学習レディネスや心理的状态、そして支援体制の整備を考慮した実践は、不登校生徒本人にとって大きな成果をもたらした。基礎学力の定着から始めた取り組みは、学習意欲を向上させ、授業への不安を減らすことができた。そして、担当教員との地道な関係作りや、学校行事を通じた感動の共有体験は、授業や学級への復帰へ向けた大きな足がかりとなった。

これらの一連の実践が、様々な活動における体験と、「ほっとルーム」内で行われる生き方指導と相まって、以下の(1)に述べるように、不登校生徒の心の変容に大きな役割を果たした。また、(2)には教員の感想を述べる。

(1) 生徒の感想

「班行動については××くんが僕にすごいきをつけてくれて最後まで僕のペースにあわせてくれてとてもうれしかったです。だからこれからも仲良くできたら仲良くしていきたいです。あとはコップを作ったできばえがすごくきになります。早くできてこないかなあ〜。」

(3年男子：修学旅行の感想文から)

「カッターは、町田号と吉場号でレースをした。僕は吉場号だった。町田号にらくに勝った。かえるときは14km歩いて達成感があったが、雨でびしょぬれになった。この3日間をふりかえってまあまあ楽しかった。」(2年男子：高原学校の感想文から)

「納涼祭は、はじめての参加でした。どんなことをするのかよくわからなかったけど、からまつ荘の人がていねいに教えてくれました。やしそばをやりました。熱かったです。でも、たくさんの注文があって大変だったけどうれしかったです。」(3年女子：ボランティアサークル感想文より)

(2) 教員の感想

「あきらめていた高校進学へ向けて目標が出来たことにより、表情が明るくなった。『学校に行こう』という意識も高まりつつあるように感じる。」

「これまでは勉強の話はタブーだったが、家族でその話題が出るらしい。母親も協力的になってきたような気がする。」

「時間割の関係で、ほとんど協力出来ませんでした。でも、時折見かける本人の顔はいい顔をしていました。」

「『ほっとルーム』は様々な役割を担っていることに初めて気付きました。何もできなくてすみませんでした。」

「『ほっとルーム』が学習支援の場としても機能することがわかった。あとは常時担当が詰めて対応できるとよいと感じた。」

8 研究の反省

実践(1)の「ほっとルーム」内における学習支援の課題は、学習の機会が不定期になってしまったため、計画的な学習が難しいという点である。そして、次回の登校まで時間が空いてしまうと学習内容も定着しにくく、同じ学習内容を繰り返すこととなり、学習効率が悪い。登校時ばかりでなく、在宅時の学習支援をどう行うかという大きな課題が残された。

実践(2)の教室復帰へ向けた取組では、学校行事の参加等大きな成果があった。しかし、周りの生徒や教員の中には「一度参加できたらあとは大丈夫だろう」という認識が根強く、不登校生徒に過度の期待をかけてしまい、かえって本人の気持ちを損なってしまった場面もあった。本人の気持ちや精神状態などの共通理解を図り、柔軟な対応を図る必要がある。

実践(3)の「生き方」に関する指導については、「体験」が本研究の大きなポイントとなったが、体験学習等の期日はあらかじめ決まっているため、当日の本人の様子によっては参加できないことも少なくない。必要に応じて事前コンサルティングを実施したり、VTR等の資料を活用して、参加に対する心理的負担を軽減する事前指導を考えたい。

9 研究のまとめ

本研究に関わる諸実践は、昨年度までの不登校生徒への対策として、SCや各学年部、そして不登校対策主任（現特別支援主事）が取り組んできた内容を整理・統合、そして体系化したものである。これまで、各担当の範囲で個別に取り組んできたため、一部の教員への負担が大きかった。また、実践により得られた成果が教員間で共有されず、何度も同じ手順を繰り返すという無駄が多かった。しかし、実践の内容を大きく3つの領域に整理・統合することにより、課題や手立てが明確となり、また、不登校生徒のどの段階でどのような支援ができるかといった対策が立てやすくなった。

結論として、進路等の不安を抱えながら登校への意識が高まってきた生徒に対しては、以下の3つの支援を計画的に実施することが効果的であることが実証された。

基礎学力を高める学習支援
関係作りを通じた学級復帰
将来へ向けた「生き方」指導

生徒の心理状態、支援体制を考慮した支援計画の立案

10 研究より学んだコーディネーターの役割

本研究における実践を通して、コーディネーターとしての役割が、生徒支援にいかに大きな影響を与えるかがわかった。支援計画の立案には、コーディネーターを中心とした情報や意見の集約が不可欠であり、また、実践の可否を含めた情報をいかに活用できるかが大きなポイントとなる。これらの実践の結果から、コーディネーターの役割は大きく次の4つに分類されることがわかった。

担任やスクールカウンセラー、そして養護教諭などの関係教員から生徒の情報を集約し、

整理すること。

定期的、継続的に実践を進めること。そして、そのための連絡・調整を図ること。

各取組による生徒の変容を関係教員に伝え、共通理解を図ること。そして、その結果を次の段階の支援計画に盛り込むこと。

研究の成果を教員にフィードバックし、共有の財産とすること。そして、他の生徒に対しても応用できる資源として活用すること。

今後の課題

中学校の3年間は、自分自身を見つめなおすとともに将来へ目を向けさせ、そのための基礎学力の定着や、心の準備をしていかなければならない。しかし、学校に登校できない、もしくは教室で授業が受けられない生徒にとって、十分な指導が行われないのが現状である。本研究では、これらの不登校生徒にどのような支援ができるか、「ほっとルーム」機能を生かした実践を中心に行った。学習面においては、基本的に不登校生徒の学習ニーズを基にした学習計画を立てていかなければならないが、生徒自身が自分なりの方向性や計画を持っていない場合もある。チーム会議などにおける個々の生徒の理解や指導の方向性、そして、うまく引き出された生徒本人のニーズとを対比させながら、生き方のビジョンを持たせ、有意義な中学校生活を送らせたいと考えている。そのためには、今後も実践を積み重ね、計画的な実践力を高めることが必要である。それと同時に、個々の不登校生徒のニーズに対応できるカウンセリングマインドや、チーム援助会議などにおける関係調整能力などを高めるために、校内研修や各種講座等から得られる知識や体験を蓄積・共有して、教員自身の力量を高めることが欠かせない。

参考文献

- ・群馬県総合教育センター『不登校問題課題解決支援資料』(2004)
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター『生徒指導資料第2集 不登校への対応と学校の取組について 小学校・中学校編』ぎょうせい(2004)